

国立国語研究所学術情報リポジトリ

北琉球沖縄語伊平屋方言の疑問文の構造とイントネーション

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-01-31 キーワード (Ja): 琉球諸語, 沖縄語, 伊平屋方言, イントネーション, 疑問文 キーワード (En): 作成者: カルリノ, サルバトーレ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000472

北琉球沖縄語伊平屋方言の疑問文の構造とイントネーション

カルリノ・サルバトーレ

大東文化大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

本稿では沖縄語伊平屋方言の疑問文の構造とイントネーションの実現について概観する。本稿ではまずこれまでの研究でまだ十分に記述されていない点を明確にする。次に伊平屋と伊平屋方言の概要をあげ、主な先行研究、アクセント体系について説明する。そして疑問詞疑問文で使われる疑問語と、共起する形式を概観する。次に肯定疑問文で現れる、疑問を現す形式を概観する。次にそれぞれの疑問文のタイプのイントネーションの実現を概観する。最後に、新たに得られた知見をまとめ、残された課題について述べる。

キーワード：琉球諸語、沖縄語、伊平屋方言、イントネーション、疑問文

1. はじめに

本稿では北琉球沖縄語伊平屋方言の疑問文の構造とイントネーションの実現を記述する。筆者のこれまでの伊平屋方言の研究で伊平屋方言のイントネーションについて次のことが明らかになっている：

- 疑問を表す形式がない場合（すなわち、疑問標識のない肯定疑問文）にのみ上昇する音調を取るという木部（2010, 2019）で「相補タイプ」とされている類型である。
- 疑問を表す形式が使用される場合、下降あるいは平板な音調が見られる。

今までの研究で肯定疑問文のイントネーションについて、=i という疑問形式に着目して記述を行った。ただし、=i が直接名詞に接続して出現するデータが欠けていた。さらに、肯定疑問文で使われるもう一つ形式、=na という疑問形式のデータもなかった。本稿では、追加調査によって得られたデータに基づいて、これまでの研究で残されていた課題に取り組む。

2. 背景

2.1 伊平屋と伊平屋方言

伊平屋方言は北琉球語群沖縄語に所属し、沖縄県伊平屋村で話されている。伊平屋村は沖縄本島北部本部半島の北に位置しており、伊平屋島と野甫島からなる。伊平屋村は伊平屋島にある田名、前泊、我喜屋、島尻と、野甫島にある野甫という5つの集落に分けられている。国勢調査の最新のデータによると、人口は1,126人で、そのうち65歳以上は333人である。伊平屋方言の主な話者層は50代以上であるため、話者数は300～400人程度だと推定できる。

2.2 先行研究

伊平屋方言の主な先行研究として、Carlino による記述文法 (Carlino 2019) や文法スケッチ (Carlino 2022) がある。イントネーションの初期的な記述として Carlino (2018a, b) の報告がある。

2.3 アクセント

本節で伊平屋方言のアクセント体系を概観する。伊平屋方言はいわゆる A, B, C の 3 つの型が区別される三型アクセントである (Carlino 2019)。これは琉球祖語について再建されている 3 つの A, B, C のアクセント系列 (松森 2012) におおよそ対応する。1 音節名詞は A と B の 2 つの型の区別しかない。各アクセント型はピッチの上昇で対立する。ピッチを担う単位はモーラである。それぞれの型の実現が次の通りである。A 型：つねに高始まり。B 型：単独で語末モーラに上昇がある。ただし、複数の助詞が連続する場合は 1 番目の助詞の最終モーラに上昇がある。3 モーラ助詞 =nkan の場合は 2 番目のモーラに上昇がある。C 型：語末モーラに上昇がある。表 1 でそれぞれの型の実現の例を挙げる。

表 1 伊平屋方言の名詞のアクセント体系

1	A	毛	[kii	[kii=ga	[kii=madi	[kii=madi=nu	[kii=nkan
	B	木	ki[i	kii=[ga	kii=ma[di	kii=ma[di=nu	kii=n[kan
2	A	鼻	[hana	[hana=ga	[hana=madi	[hana=madi=nu	[hana=nkan
	B	のみ	numi[i	numi=[ga	numi=ma[di	numi=ma[di=nu	numi=n[kan
	C	蚤	nuu[mi	nuu[mi=ga	nuu[mi=madi	nuu[mi=madi=nu	nuu[mi=nkan
3	A	東	[agari	[agari=ga	[agari=madi	[agari=madi=nu	[agari=nkan
	B	日本	jamatu[u	jamatu=[ga	jamatu=ma[di	jamatu=ma[di=nu	jamatu=n[kan
	C	キャベツ	tama[na	tama[na=ga	tama[na=ma]di	tama[na=ma]di=nu	tama[na=madi=nu

3. 調査・データの概要

本研究のデータは 2017 年～2024 年の間に現地調査によって収集された。調査協力者は伊平屋村字田名の 60 代の男性話者 3 名である。その他に、伊平屋村字島尻の 60 代の男性話者 1 名のデータも参照している。データは次のものからなる：

- 1) 日本語共通語の文から翻訳されたもの。
- 2) 発表者が用意した伊平屋村の文法性判断調査で使用了なもの。
- 3) 自然談話から抽出したもの。

データの分析は Praat (Boersma and Weenink, 2024) を使用して f0 曲線の変動の觀察によって行った。

.

4. 疑問文の構造

本節では疑問文に現れる形式を概観する。ここで疑問語と、疑問を表す接辞、接語を表す形式をまとめて「疑問形式」と呼ぶことにする。疑問語を除いた他の形式は「疑問標識」と呼ぶ。本稿で取り上げる疑問標識は次の通りである。

表 2 各疑問標識と確認されている可能な接続先		
疑問詞疑問文	-(j)oo	動詞・形容詞
	=ga	名詞・動詞・形容詞
肯否疑問文	=i	名詞・動詞・形容詞
	=na	名詞・動詞 (コピュラのみ確認)

次に疑問詞疑問文の構造と肯否疑問文の構造を概観する。

4.1 疑問詞疑問文の構造

疑問詞疑問文では疑問語と、疑問詞疑問文専用の疑問標識が使用される。まず疑問語の体系を概観し、その次に疑問標識を取り上げる。

4.1.1 疑問語の体系

伊平屋方言の疑問語を表3にまとめる。疑問場所代名詞として2つの形式が觀察されているが、そのうち maa は本島方言からの借用の可能性がある。

表 3 疑問語の体系

疑問人称代名詞	taa	tattaa
疑問代名詞	nuu	
疑問場所代名詞	maa / daa	
疑問時間副詞	iči	
選択疑問名詞	duuri	
疑問数量名詞	čassa	
疑問数詞	iku-	
疑問理由名詞	nuuga	
疑問副詞	ičan	

4.1.2 疑問標識

本節では疑問語と共起する疑問標識を概観する。伊平屋方言では疑問標識の省略も不可能である。疑問標識として、接語である助詞の =ga と接尾辞の -(j)oo がある。=ga の接続先が自由で、動詞・形容詞で語幹をホストとする。-joo は動詞・形容詞のみをホストとしてとり、直接動詞語根に接続する。語根末の分節音が子音の場合 j が削除され、-oo として実現する。形容詞の場合、形容詞語幹に接続する。形容詞語幹とは、形容詞語根と形容詞接尾辞 -sa(ha)からなるものである。

- (1) nuu=ga a-joo?
何=NOM ある-WHQ
「なにがある？」
- (2) maa=ke nz-oo?
どこ=ALL 行く-WHQ?
「どこに行く？」
- (3) nuu=ga fussa-joo?
何=NOM ほしい-WHQ
「なにがほしい？」
- (4) nuu num-u=ga
何 飲む-NPST=WHQ
「何を飲む？」

- (5) ari=ja taa in=ga?
あれ=TOP 誰.GEN 犬=WHQ
「あれは誰の犬？」

- (6) ari=ja nuu ja=ga
あれ=TOP 何 COP=WHQ
「あれは何だ？」

4.2 肯否疑問文の構造

肯否疑問文では、文末に =i と =na という 2 つの疑問標識が使用される。まず =i を取り上げる。

=i は名詞、動詞、形容詞に接続できると確認されている。名詞では =i として実現する。名詞には直接 =i として実現する。動詞、形容詞の場合、mi という表層形が見られる。本稿では深入りしないが、これは、現在の体系では -n である直説法接辞が -m であった過去の段階において、直説法接辞と =i とが融合した形が、現在まで保持された結果であるとみられる。

- (7) nuu num-u-m=i?
何 飲む-NPST-IND=YNQ
「何を飲む？」
- (8) nuu=gara fussa-m=i?
何=EXM ほしい.ADJ-IND=YNQ
「なにかほしい？」

もう一つの疑問標識は =na である。=na は名詞に直接後続することができるが、コピュラ動詞に後続することも可能である。意味のレベルでは確認要求などのニュアンスがない。

- (9) uri=ja fuuga ja-n=na?
これ=TOP 卵 COP-IND=YNQ
「これは卵か？」
- (10) uri=ja fuuga=na?
これ=TOP 卵=YNQ
「これは卵か？」

4.3 疑問標識の過去形の実現

伊平屋方言では疑問標識の =i と =ga は、接続先が過去形を取っているときに、非過去形と異なる異形態として現れる。=i は tii として（肯否疑問文）、=ga は =a として実現する（疑問詞疑問文）。

- (11) nuu=gara uti-tii?
何=EXM 落ちる-PST.YNQ
「何か落ちた？」

- (12) nuu=te i-ta=a
何=QT 言う-PST=WHQ
「何と言った？」

-tii の由来について本稿では深入りしないが、=ga が =a として実現するというのは、通時的に見ると -tii に対応する類推変化と考えられる。

- (13) koo-ta=ga → koo-ta=a

-ta の後にそのまま =ga が接続する場合もあるが、この実現は沖縄本島諸方言で見られ、借用語の可能性はある。

5. イントネーションの実現

最後に、各形式のイントネーションの実現を記述する。まず疑問詞疑問文と肯否疑問文のイントネーションの実現を見る。最後に、疑問形式がない場合の実現を見る。

5.1 疑問詞疑問文の文末イントネーション

疑問詞疑問文では、=ga の場合でも -joo の場合でも下降調が見られる。

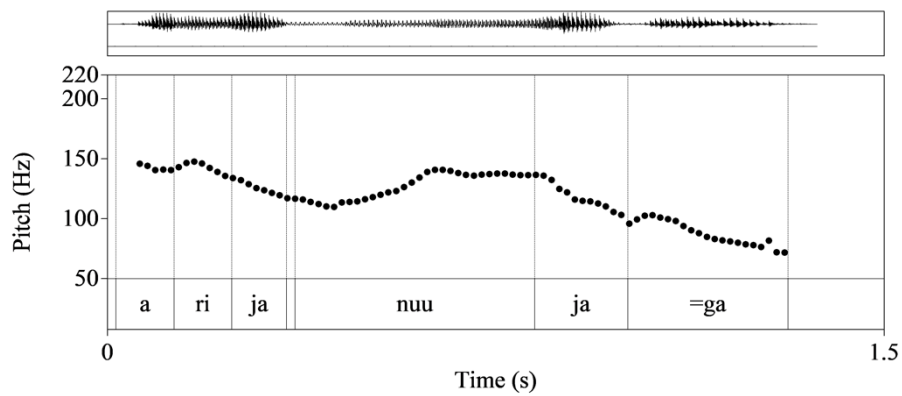


図 1 =ga の例

- (14) ari=ja nuu ja=ga?
 あれ=TOP 何 COP=WHQ
 「あれはなんだ？」

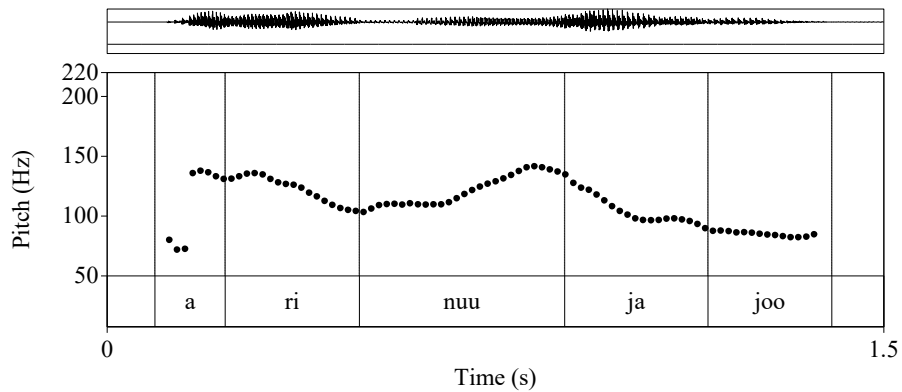


図 2 -joo の例

- (15) ari=ja nuu ja-joo?
 あれ=TOP 何 COP=WHQ
 「あれはなんだ？」

5.2 肯否疑問文の文末イントネーション

肯否疑問文では疑問標識によって異なる実現が観察された。具体的には、=i をとる肯否疑問文は高くて平板な音調をとる一方（図 3, 4），=na をとる肯否疑問文（図 5, 6）は下降する音調をとる

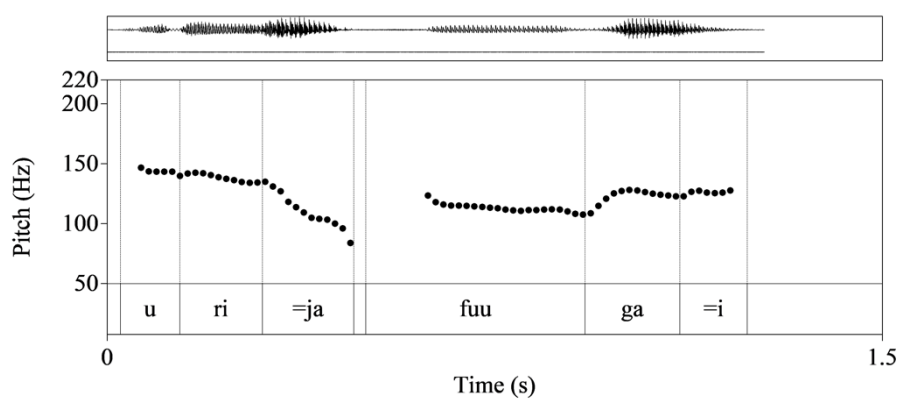


図2 =i の例

(16) uri=ja fuuga=i?

これ=TOP 卵=YNQ

「これは卵か？」

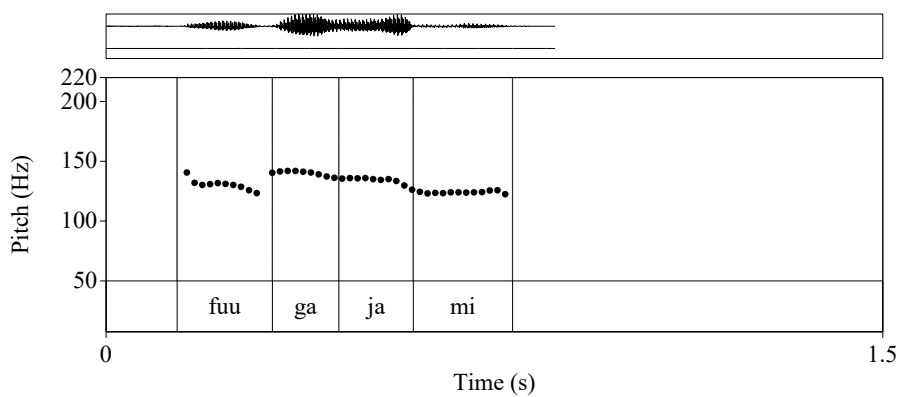


図3 コピュラと =i の例

(17) fuuga ja-m=i?

卵 COP-IND=YNQ

「卵なのか？」

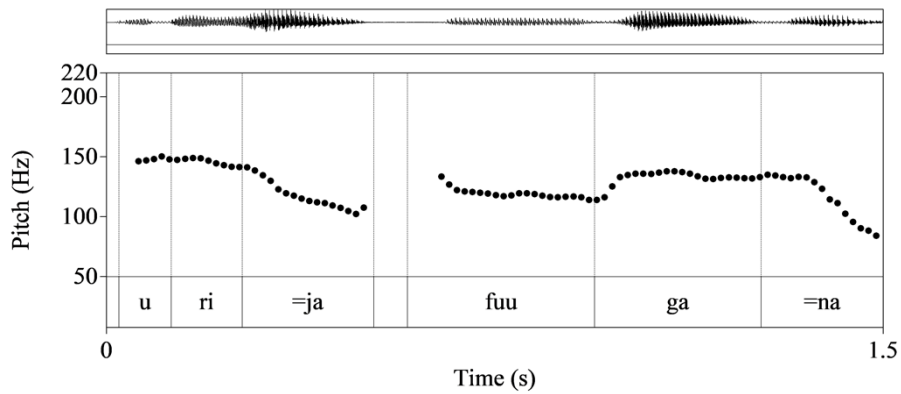


図4 =na の例

(18) uri=ja fuuga=na?

これ=TOP 卵=YNQ

「これは卵か？」

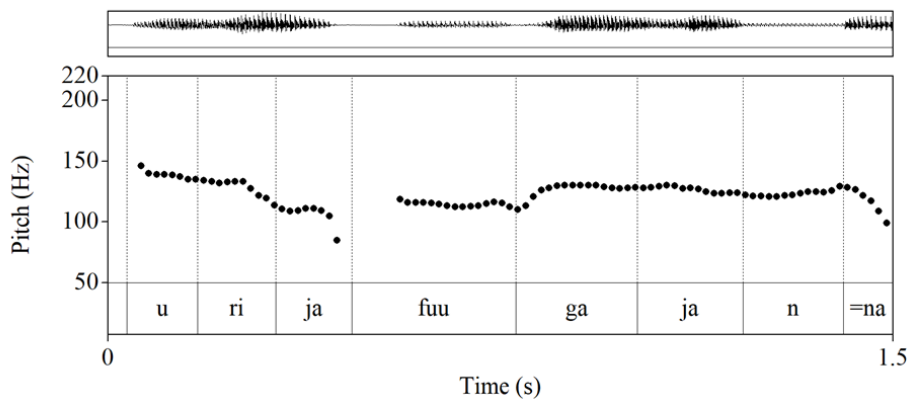


図5 コピュラと =na の例

(19) uri=ja fuuga ja-n=na?

これ=TOP 卵 COP-IND=YNQ

「これは卵か？」

5.3 疑問標識がない場合のイントネーション

疑問標識がない場合に、上昇調が見られる。ただし、典型的な質問文では疑問標識の省略が不可能である。疑問標識が省略されるのは、相手の発言を繰り返して質問するときのみであり、その場合、上昇するイントネーションが見られる。これはいわゆる Echo question である。図7では自然談話から抽出された発話である。一人の話者が瓶玉を重ねたものを「だるま」と呼んでい

て、理解しなかったもう一人の話者が繰り返して「だるま？」と質問する。このときに疑問標識がなく、上昇調が見られる。

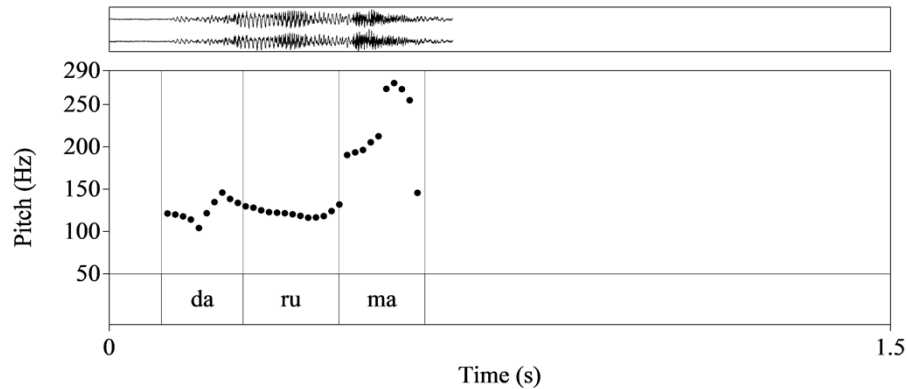


図 6 疑問形式がない例

(20) daruma?

だるま

「達磨？」

6. まとめと今後の課題

今までの研究で疑問を表す形式がない場合にのみ上昇する音調を取るという類型であることがわかっていた。ただし、記述は一部の疑問形式に偏っていた。本稿で新たに得られた知見として肯否疑問文で使用される =na という形式では下降が見られることがあげられる。=i を使った肯否疑問文のデータと、疑問詞疑問文を使ったデータだけを見れば、疑問詞疑問文では下降、肯否疑問文では平板調があると解釈してしまう恐れがあったが、=na のデータでは肯否疑問文でも下降音調が見られることがわかる。

最後に残る課題は、まだ明らかではないアクセント型とイントネーションの関係の有無を検討することである。そして、今までの研究では典型的な質問のイントネーションだけを見てきたが、今後は修辭疑問文など、他の疑問文の種類に着目し、イントネーションを明らかにする必要がある。

参考文献

- Boersma, Paul & Weenink, David (2024) Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. Version 6.4.13, retrieved 10 June 2024 from <http://www.praat.org/>
- Carlino, Salvatore (2018a) 「伊平屋島尻方言の疑問文の文末イントネーションについての初期報告」日本音声学会第 337 回研究例会, 甲南大学.
- Carlino, Salvatore (2018b) Sentence-final interrogative intonation in the dialect of Iheya, Okinawa. Paper

read at the NINJAL ICPP 2018 – 5th NINJAL International Conference on Phonetics and Phonology.

National Institute of Japanese Language and Linguistics, 29 October 2018.

Carlino Salvatore (2019) 「北琉球沖縄語伊平屋方言の文法博士論文」 博士論文, 一橋大学.

Carlino Salvatore (2022) "Iheya (Okinawan, Northern Ryukyuan)" in Michinori Shimoji ed. An Introduction to the Japonic Languages: grammatical sketches of Japanese dialects and Ryukyuan languages, Brill.

木部暢子 (2010) 「イントネーションの地域差—質問文のイントネーション」 小林隆・篠崎晃一 (編) 『方言の発見：知らざる地域差を知る』 1-20. 東京: ひつじ書房

木部暢子 (2019) 「疑問文の文末音調による系統内類型論の試み—イントネーション研究のために—」 『国語と国文学』 1142: 3-13

松森晶子 (2012) 「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」 『音声研究』 16 (1) : 30-40.

略号一覧

ALL 方向格

COP コピュラ

EXM 例示

GEN 属格

IND 直説法

WHQ 疑問語疑問文

NOM 主格

PST 過去

QT 引用

TOP 主題

YNQ 肯否疑問文